
手書きの原稿は受付いたしません。

鋼野タケシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手書きの原稿は受付いたしません。

【Nコード】

N79940

【作者名】

鋼野タケシ

【あらすじ】

僕には夢がある。キミたちにはどうだろうか。ある人もいるだろう。ない人もいるだろう。そんなことはどうでも良い。今は僕の話をしている。

【手書きの原稿は受付いたしません】

僕には夢がある。キミたちにはどうだろうか。ある人もいるだろう。ない人もいるだろう。

そんなことはどうでも良い。今は僕の話をしている。

僕には夢がある。プロの小説家になるという夢が。僕はプロの小説家志望だ。

なぜプロの小説家志望なのか。今日はその理由を話そうと思う。

子供の頃、僕は一冊の本に出会った。

『はてしない物語』という題名の本だ。作者はミヒヤエル・エンデ。『ネバー・エンディング・ストーリー』という名前で映画にもなっている。

主人公のバスチアン・バルタザール・ブックスが本の中の世界、ファンタジーに行つて冒険をするという話だ。

面白いかどうかで聞かれたら、奇跡だつて答える。単純に楽しい基準じゃ伝えるのは難しい。超楽しいなんて言葉じゃ足りない。とても楽しい。最高。素晴らしい。エキサイティング。インタラスティング。全米が泣いた。

言葉で面白さを伝えるのは難しい。だから、奇跡つて言葉で伝えるのが一番だ。そうすると、だいたいの人は勝手に理解してくれる。奇跡的な内容なんだつて。

とにかく、僕は子供の頃に『はてしない物語』を読んだ。

それから僕も物語を書いてみたいと思うようになった。

授業中でも家に帰ってから、ノートに物語を書きまくった。気分が乗っている時は文章ではなくマンガでストーリーを進めた。だ

から小説とは呼べない。あくまで物語だ。

支離滅裂で内容は無茶苦茶。途中、流行ってるものに合わせて主人公を変えたりしてた。死んだキャラクターも思いつきで生きてることにした。僕の物語にはドラゴンボールの悟空も出て来たし、ポケモンも出て来たし、スタンド使いも出て来た。

内容なんてどうでも良かった。とにかくそんな風に思うがままに物語モドキを書き続けた。

小学五年の頃。ある日、僕は本気でプロになろうと思った。

何のプロになるのかと考えて、やっぱり『はてしない物語』が好きだった僕は小説のプロになろうと決めた。

その時点で僕は、プロの小説家志望だったと言える。

間違えないで欲しいのは、プロの小説家を志望する人ではなく、小説家志望のプロだ。

『警察官の兄はスポーツマン』という言葉を知っているだろうか。警察官である彼には兄がいて、その兄がスポーツマンなのか。

彼には兄がいて、兄が警察官でありスポーツマンでもあるのか。つまり、そういうことだ。似ているようで全然意味が違う。

僕はプロの小説家を志望している人ではなく、小説家を志望する人のプロだった。

だからもちろん、小説家志望のやりそうなことはほとんどやった。

「俺、将来小説家になつから。世界一の小説家。それで超大金持ちになるんだぜ。インゼイ、知ってる？ 本売れたら金貰えんだ。百億兆万円くらい。そしたら何でもおごってやつから！ プレステでもロクヨンでもドリキヤスでも買ってやんよ。ジャンプとマガジンとサンデーとチャンピオンとガンガンとファミ通とドリマガと電プレ毎回全部買うから。立ち読みとかしねーから。超でっけえ本棚に全部取っておく」

まず第一に、自分の夢を友達に語りまくった。それから、小説家

になって印税で大金持ちになった後のことを考えた。大金持ちになった後の妄想を友達に自慢して回った。

もちろん、小説なんてまったく書かなかった。

なぜならプロの小説家を志望する人ではなく、小説家志望のプロだからだ。

小説家志望のプロは自分で小説を書くなんて真似はしない。

「この作品は全然ダメだな。主人公の心の機微が書けてない。作者が自己投影しまくって気持ち良くなりたいてってだけ。だからダメ。こいつもダメ。ただ流行に乗った感じが。要するに萌えキャラで古典名作の焼き直ししてるだけじゃん。ほんと、最近の小説ってレベル低いわ」

中学に上がった頃、僕はプロの作品をバカにし始めた。

思い付く限りバカにした。別にバカにする内容はどうでも良かった。自分でも言っている意味はわかってなかったが、それっぽいことを言えたいって周りの人は納得した。

もちろん、面白い小説でもバカにした。

なぜならプロの小説家を志望する人ではなく、小説家志望のプロだからだ。

小説家志望のプロは評判の高い作品をやたらバカにするのだと相場が決まっている。

「俺のオススメは断然コレだね。まあちょっと文学的っていうか哲学的っていうか。普段文章読まない人にはちょっとハードル高いかなあー。ユゴーとかバルザックのテイストに近いよ。ま、どちらかというと玄人向けかな。俺、ついついこういうの買っちゃうんだよなあ」

それから、難しくて内容が理解できない小説を持ち歩き始めた。読んでるだけで眠くなるから、読む気はしない。誰かが周りにいる時だけ、本を開いて文字を目で追った。内容は少しも入ってこな

い。

もちろん、難しい小説もユゴーもバルザックも読んだことがない名前しか知らない。

なぜならプロの小説家を志望する人ではなく、小説家志望のプロだからだ。

小説家志望のプロは理解できない小説を高く評価する。

ついでに、ユゴーとバルザックを高く評価する。読んでなくても名前がかっこいいからだ。

そして『俺、活字中毒なんだよ』アピールを欠かさない。読んでなくても。

「へえ、キミも小説書くんだった？　ちよつと読ませてよ。……うーん、悪くはないよ。でもこの作品、十年も前にまったく同じ設定のがあったよ。読んだことある？　ふうん、ないんだ。まあ誰にでも思い付く話だしね。そうだなあ、まずは取っ掛かりの部分で読者の心を掴めてないよね。俺ならこれが雑誌に載っても読まないもん。まあキャラクターの魅力を引き出せたら多少良くなるんじゃない？　たとえばここをさあ……」

高校に入学する頃には、プロの小説家を志望する人の作品に口を出した。

まずは上から目線で批判する。それから自分の好みで内容に手を加えさせようとする。

必ず『ああ、今このレベルなんだ。俺もキミくらいの頃は色々努力したよ。まあ頑張れば今よりは良くなると思うよ』的な自分優位の立ち位置を崩すことは決してしない。

誰に対しても同じ態度で臨んだ。僕よりずっと努力をして、小説を本気で書いてる人に対してもだ。

相手が顔を真っ赤にして怒っているのを見れば、『本当のことを言われて怒るのはレベルが低い証拠。悔しければ俺みたいにプロのレベルに近付けば良い』と言ってやった。

もちろん、殴られた。

高校を卒業する頃には、友達が一人もいなくなっていることに気が付いた。

なぜなら卒業式のあと、僕以外のクラスメイトがお別れ会をやっている場面に遭遇したからだ。僕は家族と一緒に卒業祝いの外食に向かう途中だった。あの日の悔しさを忘れたことは一度もない。ちくしょう。

だから僕は小説家を目指した。あいつらを見返してやるために。そして小説家志望のプロを抜け出して、プロの小説家になるために。

大学に上がる頃には、本気で小説を書き始めた。キチンと文字だけで構成された物語だ。

原稿用紙を千枚買って、万年筆を買って。勉強机の上から余計な物は全部捨てた。

在学中にデビューするつもりで、毎日毎日書いた。失敗しては破り捨て、部屋中を失敗した原稿で埋め尽くした。友達もいなかったから、遊びに誘われて執筆が進まない日なんてなかった。

そして半年掛けて大作を書き上げた。何度読み返しても完璧な作品。非の打ち所がない、才能に溢れた物語。ミヒヤエル・エンデにも負けてない。ユゴーにもバルザックにも負けてない。読んだことはないけど。

くだらない注意事項に引っかけられて審査員に読まれなかったらたまらない。そう思って、僕は雑誌の応募要項をもう一度見直した。つらつらと応募要項が書かれている。

僕はそれを目で追っていった。

【4・原稿枚数】

42字×32行の書式で、100枚以内の原稿（原稿用紙換算で約350枚） 1

よく見れば、コメ印の注意書きがしてある。ページの一番下にコメ印がもう一つあった。

1

・手書きの原稿は受付いたしません。

僕は何度も読み直した。応募しようと決めた時、僕は締め切りと応募枚数しか読まなかった。

なぜなら応募しようと決めたは、締め切りと応募枚数しか読まなかったからだ。

僕は更に何度か読み直した。

なぜなら何度読み直しても、書いてあるその言葉が見間違いでなかったからだ。

手書きの原稿は受付いたしません。

7

「へえ、キミも小説書くんだ。パソコン持つてる？ ああ、それなら何とかなるんじゃない？」

プロの小説家になるには、パソコンを言えば良い。ただそれだけだ。

だからパソコンを持ってない僕は、今も小説家志望のプロのままである。

（後書き）

断っておきますが自伝ではありません。断じて。

今、来年の頭に応募する予定の作品を書いているんですが、なかなか展開が浮かばずに悩んでいたある夜、ふっと浮かんだ物語です。

プロの作家を目指す中学生が、夏休みを使って小説を書き上げる。某ジャンプまんがのような夢を追う少年の青春ストーリー！のはずが、ごらんの有様です。どうしてこうなった。

そして断っておきますが自伝ではありません。断じて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7994o/>

手書きの原稿は受付いたしません。

2010年11月8日22時10分発行